

---

es of Full Power and Destruction ~ **全力全壊の剣戟** ~

遊守護者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate/The Blades of Full Power  
and Destruction 〔全力全壊の剣戟〕

### 【Nコード】

N1078BA

### 【作者名】

遊守護者

### 【あらすじ】

UBW後のエミヤシロウは剣の丘で死を受け入れようとしていた。そこで彼の最愛の女性が現れ、彼を違う世界へ転送したが・・・。

## く注意書き

皆さんはじめまして。 遊守護者です。

初めて書く小説なので注意しておきたい事がたくさんあります。

一、日本語下手です。アメリカに住んでいたので日本語がおかしいところがあるかもしれませんが気にしたら負けだと思ってください。

二、自分は「魔法少女リリカルなのは」を見たことがないです。つまり、ストーリー崩壊、キャラ崩壊等大変なことが起きると思いますが、そこは温かい目で見てください。 勉強してきます。

三、二と同じく「Fate/Stay Night」やったことありません。アニメと映画しか見ておりません。 勉強してきます。

四、オリジナル宝具が出てくる可能性があります。 出たときに説明しておきますので楽しみにしてください。

五、主人公はUBW 後のエミヤシロウです。 ちよつとだけ口リコンであるが、物語が進むと恋愛感情が出てきます。

シリアス、コメディのある物語にしていきたいと思います。

よろしく願います!!

## 〜エミヤ設定〜

エミヤシロウの設定していきます。

名前：エミヤシロウ

UMB後である。

この物語の主人公です。凜に転送され、26歳から9歳に戻ります。魔術回路は原作の4倍、84になります。理由は物語が始まってから説明が入ります。

髪の毛は白。

肌は浅黒い。

瞳は鋼鉄色。

魔術回路の数が増えたことにより、鈍感じゃなくなりました。

前回では言っているが、ロリコンだけど物語が進むと恋愛感情に変化します。

相変わらず皮肉屋ではあるが、かなりやさしく親しみ易い設定にしています。

く別れく(前書き)

感想ありがとうございます。

頑張りますので応援してもらえようねしいです…！

く別れく

I am the bone of my sword .  
体は剣で出てきている。

Steel is my body , and fire is  
my blood .  
血潮は鉄で、心は硝子。

I have created over a thousand  
blades .  
幾たびの戦場を越えて不敗。

Unaware of loss .  
ただ一度の敗走もなく、

Nor aware of gain .  
ただ一度の勝利もなし。

Withstood pain to create many  
weapons waiting for one's arri  
val  
担い手はここに独り剣の丘で鉄を鍛つ。

I have no regrets . This is the  
only path .  
ならば、我が生涯に意味は要らず。

My whole life was " Unlimited B

l a d e  
W o r k s ”

この体は、”無限の剣で出来ていた”。

血に染まった紅い外套を着た男は独り、剣の丘で立っていた。

「ガハッ！！」

俺は血を吐いた。

「・・・フツ。この傷だと、もう俺にはないな・・・。」

俺の名はエミヤシロウ。

否、衛宮士郎である。

俺は自分の理想を貫いてたくさんの人を救った。

大切なものも切り捨てた。

大勢の人に恨まれ、裏切られた。

だが、笑顔で「ありがとう。」と言われた事もあった。

俺は救えなかった人達を見るんじゃない。

俺は救えた人達を見た。

誓った。決してアイツの様にはならないと。

「だけど、俺は固有結界 ” 無限の剣製 ” を使っていたこともあり、体はアイツと重なっていた。」

「今思うと、結局アイツとほぼ同じだよな。」

魔術協会は俺を追い、俺の魔力が暴走して無数の剣が俺を刺していた。

「なあ親父・・・俺正義の味方になれたかな？」

返事が来るはずもない質問をした。

「俺頑張ったよな。セイバーもそう思うだろう？」

「たくさんの人を救って、感謝もされた。アーチャー、羨ましいだろ？」

アーチャーに嫌味を言ったが、聞いてっかな？

「俺もういいよな？ 親父・・・もう少しでそっちにいきそうだし。」

俺は笑いながら言った。

「彼女に見られたら、きつと」情けない。「って言うだろうな・・・」

「情けない。」

懐かしい声を聞いてびっくりした。

「え？」

と言いながら振り返ると

「本当に情けないわね！」

そこに最愛の女性がいた。

「遠坂、いたのか・・・。」

「ずっといたわよ！ そんな独り言聞いたら泣いちゃうじゃない・・・。」

遠坂は涙を零しながらそう言った。

泣かせてしまった。最期の最後で遠坂を泣かせてしまった。

「大丈夫だよ、遠坂。」

涙を拭きながらそう言った。

「全然大丈夫じゃないじゃない!!」

大声出しながら俺から離れた。

「遠坂はどんな用事で俺に会いに来たんだ？」

「アンタの死体を回収しに来た。」

やっぱりそうか……。

魔術協会は俺の体を回収しようとした。なぜなら、俺は固有結界が使えるからだ。

固有結界は魔法に近い魔術だ。

俺の体を研究するのもわかる。

そんなこと思いながら遠坂が言った。

「と、言う設定で来てるわ。」

「は？」

俺は思わず口を開いた。

「本当は違う世界に転送するために来たのよ。」

「そんなことしたら遠坂は!!」

魔術協会に追われるぞ！　まで言いそうだったが。

「承知の上よ。対策を作っているから安心しなさい。」

「やっぱり遠坂はすごいな……。」

「ちよつと動かないで。」

遠坂は俺の傷を治療し始めた。

治療が終わった後、転送する準備がすぐ始まり整った。

「いくわよ。」

「遠坂……最後まで迷惑かけたな。ありがとう。」

「べ、別に気にしなくていいわよっ!……まあ、そうよね。これで最後にしておきなさいよね。」

「ああ、わかってるさ。」

「私のことはいいから、幸せになって彼女でも作んなさい。」

「その言葉、もう取り返せないぞ?」

「ふん！ 何とでも言いなさい！」

「はいはい……。」

笑いながら言った。

「さようなら……、士郎。」

「はぁ……、」「さようなら」「じゃないぞ遠坂。」

「……そうよね。」「またね。」「」

涙目になりながらも最高の笑顔で言ってくれた。

こっちも笑顔じゃないとな。

「あぁ、」「またな。」「」

く着地成功・・・!??

「ああ、「またな」。」

遠坂と別れた後、暗闇に落ちた。

「なんでさ?」

あまりの状況に失笑していた。

俺は空から落ちているのだからだ。

「オン 同調(トレース)・開始

構成材質、解明

構成材質、補強

全工程オフ(トレース)、完了。」

地面に衝突した。

「ふう・・・何なんだ今の。遠坂はすっかりなのは知ってるけど、まさかここまでとは・・・。強化してなかったら死んでたぞ!」

そんなこと思いながらも状況把握しておかないといけないと思った。

「解析・開始」

まずは肉体だな

外面身体の損傷箇所なし

神経、内蔵等内面も損傷箇所なし

体内『全て遠き理想郷』アウアロン 正常動作中

身体機能の異常なし

警告 1 肉体面の差異あり 肉体年齢、約 9 歳

「なんでさ！？なんで9歳なってんの！？しかも服ブカブカだし。．．．あとでいいや．．．」

後は俺の戦力である魔術回路だな。

魔術回路 8 4 本確認

動作可能回路 8 4 正常

魔力量正常

「え！？ 魔術回路 8 4 だと！？ どういうことなんだ．．．」

周りを見ると自分は森の中にいるようだ。

夜のようにだ。

「あれ？何でこんなところにかばんがあるんだ？」

中身を見ると、宝石と手紙が入っていた。

「どれどれ？」

士郎へ

大丈夫かしら？

まあ、大丈夫でしょうね。

「おい。」

思わずツッコミをいれた。少しくらいは心配しろよ。

きつと魔術回路の数に驚いてるわよね。

「なぜわかる。」

理由は転送するときには宝石結構使って増やしたのよ。

4倍くらいかしら？それくらいなら宝具の投影も余裕よね。

宝石は資金のために売っていいから。

結構高いから大丈夫と思うわ。

あつ、忘れてた。

「ん？なんだ？」

着地大丈夫だった？

「……………」

俺泣いていいかな？

体はたぶん異常があると思うのよね……。

私のうっかりとか言っちゃダメだからね！

「アイツのうっかりのせいだアイツのうっかりのせいだアイツのう  
っかりのせいだアイツのうっかりのせいだアイツのうっかりのせい  
だアイツのうっかりのせいだ。」

私が言っても無駄だと思うけど無茶しちゃダメよ？

幸せになって、彼女作ってもいいのよ。私が許可してあげる。

「いいんだ……。」

桜たちはまかせて。私がしっかり守るから。

遠坂凜

またね

「……俺はいつまでも遠坂迷惑かけてるな……ってあれ？」

P.S 私のこと凜って呼んでね。

「ああ……わかったよ。凜」

そして俺は気を失ってしまった。

S i d e    ? ? ?

ズゴーン!!!!!!

「ふえ!? な、なに! ?」

森の方から大きな音がした。

(見に行ったほうがよさそうだね)

(うん、わかった。)

下へ降りたけど、あれほどの音なのにみんなが起きないのは何でだろう?

森の方へ走っていくと、わたしと同じくらいの男の子がいた。

うわっ！ 服ブカブカ・・・って気にしたら負けだよね・・・。

「ど、どうしたの!？」

返事が返ってこなかった。

(大丈夫だよ。気を失ってるだけみたい。)

「よかった・・・でも、どうすればいいんだろっ?」

(荷物も彼のもののようにだ。とりあえず、彼を家まで運んでいこう。)

「!」

Side out

高町家と土郎（前書き）

高町土郎の一人称がわからないのでとりあえず僕にしました。  
違ってたら教えてください。

どうぞ！

高町家と土郎

目が覚めたら知らない天井があった。

「ここはどこなんだ？」

「あつ、起きたんだ。よかつた。」

横を見たらとてもかわいい女の子がいた。

髪の毛がオレンジだから印象深い。

この女の子から強力で大量な魔力を感じた。

優しい性格で嘘をつかない様な印象だ。

「君が俺を運んでくれたのか？」

「うん。森の方から大きな音が聞こえたからすぐに行ったよ。」

「なるほどな。」

女の子なのによく運んだな。

「君の名前は？」

そういえばまだ自己紹介してなかったな。

「俺は衛宮士郎だ。君は？」

「わたしは高町なのは。家族と仲がいい友達なのはって呼んでるの。君もなのはって呼んでいいよ。」

「わかった、なのはだな。俺も士郎でいいぞ。」

「士郎君、でいいよね。よろしくね。」

か、かわいい・・・襲いたいけど襲ったらやばいって・・・。

考えちゃダメだ。考えちゃダメだ！！

そういえば、日が昇っているが今何時だろう？

「すまないが、今何時か教えてもらえるか？」

「え？うん、いいよ。今ね・・・10時だよ。」

「10時か・・・なのはは何時に俺を見つけたんだ？」

「12時くらいかな？」

10時間寝てたのか。相当疲れていたようだな。

「ついてきて。家族のみんなに紹介するから。」

「ああ。」

俺となのはは階段から降りて、台所へ向かった。

「おつ、目が覚めたのかい？よかったな、なのはが夜中に起こして、君が気絶していたから心配したよ。」

見た目からして 父親だな。

髪の毛は茶色だ

「あら、おはよう。」

姉さんかな？ かなり美人だ。

髪の毛はなのはと同じオレンジだ

「おはよう、怪我は・・・ないようだな。」

なのはの兄さんだな。なのはの父親とかなり似ている。

「おはよう。」

なのはの姉さんだ。父親と同じ色だな。

「一人ずつ紹介してくね。」

「ああ。」

「この人はわたしのお父さん。名前は高町士郎。」

「よろしく。」

「次はわたしのお兄ちゃん。高町恭也って言うんだよ。」

「よろしくな。呼び捨てでいいぞ。」

「わかった。」

「眼鏡をかけた人はわたしのお姉ちゃん。高町美由希。」

「よろしくね。」

「最後に、わたしのお母さんだよ。」

「え？」

「どうしたなの？」

「お母……さん？」

「そつだよ……？」

「馬鹿な……」

どう考えても20代前半か後半くらいだろうー！

「どづしたの……？」

「いや・・・なんでもない。」

「????まあ、いつか。名前は高町桃子。」

「よろしくね。」

「それで、お前の名前は？」

恭也が名前を聞いてきた。

「俺の名は衛宮士郎。よろしく。」

「ほう、僕と同じ名前か。よろしく。」

「よろしく。」

「士郎君はどこに住んでるの？」

「ないです。でも、親からの遺産があるので家を買って一人暮らしするつもりです。」

「ダメよ!」

桃子さんにダメだしされた。なぜ？

「なんですか？」

「子供を一人暮らしさせるなんて、私が許さないわ!」

「は、はあ・・・。」

ある意味すごいな、この人。

「と、言うわけで。 土郎君。」

「はい。 何でしよう？」

「1111に住みなさい。」

「えっ？」



笑顔で言ってくれた。・・・美人だなあ・・・。

桃子さんはなのは何か言ったがよく聞こえなかった。

桃子さんが離れた瞬間、何か恥ずかしいことでも言われたのか、なのは顔は真っ赤になった。

その後なぜかなのはが突然やる気を出した。何だろういったい？

「俺はどこでも寝れるんだが、どこで寝ればいいんですか？」

寝床を聞くとなぜか桃子さんはニヤニヤしていた。イヤな予感がする。

「士郎君はなのはの部屋で寝てもらおうわ。」

「え？」

「士郎君になのはの部屋で寝てもらおうよ。」

「あの、それさすがに。」

「いいわよね？」

笑顔で言ったけど怖い。怖いよ、桃子さん。

「は、はい・・・。」

「し、士郎くん・・・。」

そしてなのはは涙目であった。

Side なのは

「……はあ……。わかりました。お世話になります。」

「それでいいのよ。」

お母さん、土郎君かわいそうだよ……

お母さんが寄ってきた。なんだろう？

「よかったわね、なのは。土郎君に好かれるようにガンガンアタックしてきなさい!!」

聞いた瞬間わたしは顔を真っ赤にした。

確かに一目惚れだったけど……。

ううん、頑張る！わたし頑張るよ！お母さん！

「俺はどこでも寝れるんだが、どこで寝ればいいんですか？」

そういえばそうだった。

お、お母さんなんでニヤニヤしてるの？

「士郎君はなのはの部屋で寝てもらっわ。」

「え？」

え？

「士郎君になのはの部屋で寝てもらっよ。」

「あの、それさすがに。」

う、うれしい！・・・やっぱりだめえええ！ 士郎君頑張ってる！

「いいわよね？」

「は、はい・・・。」

え〜！？ もう少し頑張ってるよ〜。

「し、士郎くん・・・。」

お母さん・・・ありがたいのかわからないのかわからないよ〜。

Side out

高町家と土郎（後書き）

どうでしたか？

感想書いてもらえるとうれしいです！

これからもよろしくお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1078ba/>

---

Fate/The Blades of Full Power and Destruction ~ 全力全壊の剣戟 ~

2012年1月3日05時46分発行